

第十五話

佛法と云うは只今の一念を空
しく過ごさず清浄に用いる事也

丸川 春潭
延時 真覚

いちにちしんがくもちものきたほうようと ししめい
一日心学を用いる者来りて法要を問う。師示して云わく、
ぶつぼういふんべつもみおさようことあらあとおも
佛法と云うは分別を以って身を取むる様の事に非ず。跡を思
のちふんべつただいまいちねんむなしす
わず、後を分別せず、只今の一念を空く過ごさず、清浄
もちことなりゆえこじんこういんおことだいいんが
に用いる事也。かかるが故に古人も光陰を惜しむ事、第一に
すすめられたりと云うは、こころをまもぜんあくねん
に進められたりと云うは、心をはしと守り、善悪の念とも
うはらわれはなることなりきてまたしんあらたこといんが
に打ち拂って、我に離る事也。扨亦、心の改まる事は、因果
どうりまもよなりたとえひとわれにくわれひと
の道理を守りたるが好き也。喩えば人我を憎むとも、我人を
うらむりひとわれにくわれこいんが
恨むべからず。なにが無理に人我を憎むべし。我に此の因果
あそらん、いかにいんがあらおもわれせ
こそ有らん、まだ如何なる因果か有んと思つて我を責むべし。
ばんじいんがしだいなりまもふんべつしおさてふん
万事因果次第也と守つて、分別の仕置きすべからず。扨も分
べつしおようたものなりきよねんちゆうやしゅうせつあくとうどもふんべつ
別の仕置き用に立たぬ物也。去年忠弥、正雪の悪黨共、分別
よえなくすれば、ふんべつままなこころえのこ
に思い、謀反を企だて、忽ち殺されたり。なにが天道が許
おもむはんくわたちまこころてんどうゆる
してこそ、そうじてものごとふんべつしだいなものあらみなてんどうしだ
に成る物也。捨而、物毎分別次第に成る物に非ず。皆天道次第
なものなりよこまもおおいしんきよことなり
に成る物也。好く是れを守れば大に心の清まる事也。

(上124)

いちにちしんがくもちものきたほうようと
 一日心学を用いる者来りて法要を問う。

ある日、心学を学んでいる者が来て、仏法について質問した。心学というのは、一般には、石田梅巖から始まる石門心学のことを言うのでありますが、石田梅巖という人は、鈴木正三和尚没後30年後に生まれた人です。一方、陽明学を心学と呼ぶこともあり、ここで言う「心学」というのは、陽明学のことだと思われます。日本の陽明学の祖である中江藤樹は、1603年、現在の滋賀県高島市に生まれております。中江藤樹は、愛媛大洲藩おおすはんの藩士を経験し、後に、郷里に一人残した母への孝養こうようのため、帰郷し、生家せいかで日本最初の私塾を開いたのであります。中江藤樹の教えは、「致良知」（良知に致る）という言葉に代表されます。良知というのは良心、美しい心。人は誰でも天から与えられた美しい心を持っている。しかし、その良知が我欲によって曇ってしまうので、絶えず磨きつづけ、鏡のように輝かせておく努力が必要であり、良知が明らかになれば、天と我とが一体になって人生は安らかになるというものであります。良知に到るには、日常、五つのことを心がければ良いという。なごやかな顔つきをし、思いやりのある言葉で話しかけ、澄んだ目でものごとを見つめ、耳を傾けて人の話を聴き、真心をもって相手を思う。そして、何より正直であることが大切であると説いております。中江藤樹は、生計のために酒を仕入れ、それを量り売りしていたが、塾が忙しくなったので、村人が自主的に自分で量り、自分で代金を計算して置くようにした。月末に精算したとき、酒の量と代金に狂いがあるということがなかったといえます。また、村で落とし物があると、それは、必ず落とし主が捜し出されて、返されたという。江戸時代、そんな村があったのであります。一方、鈴木正三和尚は、『万民徳用』という書物の「商人日用」の一節で、商人の職業倫理を述べられている。ある日、一人の商人が、「商売で儲けるのに忙しく、悟りの道に進むことができませんが、どうし

たら良いでしょうか」と聞きますと、鈴木正三和尚は、「売買をせん人は、先ず利益の増すべき『心づかい』を修行すべし」と、商人は先ず金儲けを追及すべきことを教えます。鈴木正三和尚のいう「心づかい」とは、「身命しんめいを天道なげうに擲なげうって、ひとすじに正直しんめいの道を学ぶことなり」「正直の人には、諸天の恵み深く、仏陀神明しんめいの加護があり、災難を免れ、自然に福をまし、衆人に敬愛され、万事心にかなうようになる。これに対し、私欲をもっぱらにして自他を隔て、人を抜きて利を得んとする人は、天道のたたりあり、禍をまし、万民の憎しみを受け、衆人の愛敬あいけいなくして、万事心にかなわざる仕儀にいたる。この売買の作業は、国中の自由をなさしむべき役目の人びとに、天道より与えられたるところと思い、身を天にまかせて利を得んとする心たゆみなく、つねに正直を旨として商いすれば、火が乾けるものにつき、水が低きに下くだるように、万事心にかなうにいたるべし。さらに、この身を世界なげうに擲なげうち、ひとすじに国土のため、万民のためと思い入れて、自国のものを他国に移し、他国のものをわが国に持ち来たりて、諸人の心にかなうべしとの請願せいがんをなし、国々をめぐるとは、業障ごっしょうを滅ぼす修行なりと心得て、山々を超え、大河小河を渡りて心を清め、漫々たる海上に船を浮かべる時は、身を捨てて念仏し、一生は、ただ浮世の旅なることを観じて、欲を離れて商あきないをすれば、諸天これを守護し、自然に菩提心成就して、ついには無碍むげ大自在の人となり、乾坤に独歩すべし。この理、堅固に用いよ。」

以上のように、中江藤樹にしても、鈴木正三和尚にしても、何より正直であることが大切であると説いております。

先程の陽明学すなわち心学を学んでいる人の問いに対して、鈴木正三和尚は次のように答えられた。

ししめ い ぶつぼう い ぶんべつ も み おさ よう こと あら
師示して云わく、佛法と云うは分別を以って身を収むる様の事に非ず。

「禅というものは、あれこれと分別をして身を修める道ではない。

分別というのは、ああしたらこうなる、こうしたらああなるというように、理論的に物事を分別した上で、そのとおりに事を運ぼうとするものである。」「禅とは、そのような分別を用いて身を修めるものではない。」

跡^{あと}を^{おも}思^{おも}わず、後^{のち}を^{ふんべつ}分別^{べんべつ}せず、只^{ただ}今^{いま}の^{いちねん}一^{むなし}念^すを^す空^くく^{しょうじょう}過^ごさ^さず、清^{しょうじょう}淨^{じょう}に^{もち}用^{ことなり}いる^{もち}事^{ことなり}也^{なり}。

さらに鈴木正三和尚は、「禅というものは、過ぎ去ったことも思わず、先のことあだ、こうだと分別せず、只今の一念を空しく過さず、充実して生きることである。」と言われた。道元禅師の『正法限蔵』^{しょうぼうげんぞう} 有時^{うじ}の巻^{まき}に、【いわゆる有時^{うじ}は、時^じすでにこれ有^うなり、有^うはみな時^じなり】という一節がある。有時の「有」というのは存在のことであり、「時」とは、もちろん時間である。だから時間と空間の関係を説いたものが『正法眼蔵』^{しょうぼうげんぞう} の有時^{うじ}の巻^{まき}である。道元禅師は、時間はことごとく空間である、空間はことごとく時間である、と説いている。過去は、すでに過ぎ去って今はない。未来は、いまだ来らず現在にはない。あるものは今。その今という時間は、昔から言われているように、「いまといういまなるときは、なかりけり、まのとき来ればいのときは去る」。今、今と言うけれども、今という時間は、ないではないか。いまと言っているうちに、「ま」の時には、すでに「い」はなくなっている。アツという間に時間は過ぎ去っている。つまり、過去と未来の接点であるところの今という瞬間に生きるほかに、私たちの生きる所はないのであります。ギリシャの哲学者ヘラクレイトスは、この世界に存在するすべてのものは、一瞬たりとも静止していることはなく、絶えず生成と消滅を繰り返していると主張した。「我々が水の流れの中に足を踏み入れた時、今触れている水は、足を踏み入れた時の水ではない。」と言っている。ここで、「清淨に用いる」とは、「念々正念歩々如是」で、一念一念が正念に住しているというこ

とである。すなわち、鈴木正三和尚は、「過去を思わず、未来を分別せず、只今の一念を空しく過ごさずに、正念に住することに専念せよ。」と言われるのである。

要するに、過去は、過ぎ去って今はないのだから、反省することは良いとしても後悔などして思い悩んで、過去に引きずられては致し方がない。未来は、まだ来ないのだから、ああだろうか、こうだろうかと、将来への過度の期待や不安を抱いてもどうしようもないのである。大事なことは只今の一念、それを空しく過ごさず、充実して、しかも、正念を相続することだけだ、という。

かかるが故に古人も光陰を惜しむ事、第一に進められたりと云うは、
 心をはっしと守り、善悪の念ともに打ち拂って、我に離る事也。

昔から禅堂の板木には、【生死事大、光陰惜しむべし、時人を待たず、慎んで放逸することなかれ】と、時間を何よりも大事にするようにと書いてある。人生は、短いがゆえにこそ今日の日・只今の一刹那を悔いなく、力いっぱい生きようというのであります。時間を大切にすることは、どういうことかという、「心をはっしと守る。これは鈴木正三和尚一流の表現の仕方、心を散乱させないように三昧を修し、その上で雑念・妄想を断ち切ってしまい、俺が俺がという自己中心の自我の念を断ち切ることである。それを光陰を惜しむというのである。」と、鈴木正三和尚は、「自我の念を離れる」ということを強調されている。道元禅師も、「学人第一の用心は、まず我見を離るべし。我見を離るとは、この身を執着すべからず。」と言われております。我が強いと、他人の忠告を聞かないから、その人は、何時まで経っても少しも変わらず、人間的な成長がない。我を捨てて、他人の言うことに耳を傾けるようになると、自分の気がついていないことに気が付くようになる。この「我を捨てる」というのは、我利、我欲の執着から離れることであり、鈴木正三和尚のいう「我に離る」という

ことである。

さてまた しん あらた こと いん が どうり まも よ なり たと
 扱亦、心の改まる事は、因果の道理を守りたるが好き也。喩えば
 ひとわれ にく われひと うらむ べからず。なにが 無理に ひとわれ にく
 人我を憎むとも、我人を恨むべからず。なにが無理に人我を憎むべし。
 われ こ いん が あ い か いん が あら おも われ せ
 我に此の因果こそ有らん、まだ如何なる因果か有んと思つて我を責む
 べし。

「また心を純粹にするためには、因果の道理を守るのが良い。」仏教では、我々に起こる結果は、自分のやった行いが生み出すものだと言われ教えられる。善因善果、悪因悪果、自因自果の鉄則の通り、まかぬ種は生えない。これが因果の道理である。「たとえて言うならば、他人が私を憎んでも、私はその人を恨んではいけない。どうして人様が理由なしに私を憎むことがあるであろうか。自分が種をまいて、私の方に憎まれる原因があるからこそ、憎まれるのだ。どこに人から憎まれるような原因があるのだろうか、その原因を追及して大いに反省することが大事である。」

ばん じ いん が し だいなり まも ふんべつ し お さて ふんべつ し お
 万事因果次第也と守つて、分別の仕置きすべからず。扱も分別の仕置
 きよう た ものなり
 き用に立たぬ物也。

「自分が蒔かない種が実るわけがない。知らず知らずの間に人様を損なうようなことをしているに違いないのである。ああすればこうなる、こうすればああなるというような具合に、ああだのこうだのと頭の中で思いをめぐらしてみても、そんなものは役に立つものではない。」

きょねんちゆう や しょうせつ あくどうども ふんべつ よ ふんべつ まま な
 去年 忠弥、正雪の悪黨共、分別さえ能くすれば、分別の俤に成る
 こころ え の こ おも むほん くわ たちま こころ
 と心得、呑み込んだように思い、謀反を企だて、忽ち殺されたり。

1651(慶安4年4月20日)、三代將軍徳川家光が没した時勢に乗じ、
 まるはしちゆう や くわだ
 丸橋 忠弥と由井正雪は、幕府のご政道を改めようと企てた。これは、

その「慶安の変」のことを言っている。幕臣である鈴木正三和尚は、あの事件に関わった者達を悪党どもと言っている。正雪ほどの軍学者が、駿府で城から武器を奪って久能山に向かい、家康の残した金を奪い、江戸では、小石川の幕府火薬庫を爆破して江戸城を占拠し、四代将軍家綱を人質とするというように、綿密に計画を立て、分別していた。物事が計画どおりに運ばば、あの事件は成功したであろう。しかしそれは、みんな外れて、全部捕まって殺されてしまった。

なにが天道が許してこそ。捻而、物毎分別次第に成る物に非ず。

そういうような不逞な計画を立てても、そんなことを、どうして天道が許そうか。すべて物事というものは、自分の立てた計画のようになるものではない。この世の中は、自分ひとりで生きているのではなく、周りの全てのものに生かされているのである。

皆天道次第に成る物也。好く是れを守れば大に心の清まる事也。

『中庸』に【誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり。】とある。「誠は天の道」、天道の運行には一つの誤りもない。春が来れば夏になる。水は高いところから低いところに流れる。台風が起これば風が吹く。暖くなれば植物の芽が出る。日は東から昇り西に沈んでゆく。世の中のことは一つも間違いなく動いている。「これを誠にするは、人の道なり」、お百姓さんが一生懸命、野菜を作ると、りっぱな野菜が出来る。いい加減な作り方をしたのでは、良い野菜が出来ない。本来、野菜の種は、一所懸命育てれば、立派な野菜になる。これが、天の道であり、自然の摂理である。野菜を「誠」にする、本来の野菜の姿に立派に育てることが、お百姓さんの仕事であり、人の道であります。このように、「誠」となるように努力することが人の務めということである。

余談になりますが、私が鎮西道場で、坐禅を始めた頃、『合掌』の

表紙に出ていた言葉に、正受老人の「天下の一大事とは、今日只今の心なり」というのがありました。当時の私は、この言葉にどれほど励まされたかわかりません。私どもは、既に済んでしまったことを思い出して、懐かしんだり悔やんだり、恨んだり、または、これから先のことを考えて、不安や恐れを抱き、悩み苦しむのであります。結局、過去や未来に振り回されて、「今・この瞬間の心」を見失っているのです。一番大事な足もとが留守になって誠に危ない心の状態でございます。だから正受老人は「天下の一大事とは、今・この瞬間の心であるぞ」と言われているのであります。「今日一日を、この瞬間を、しっかり生きなさい」という意味であり、過去を思い出して悔やんでは心が過去にあり、今を生きていないのであります。また、まだ来ていない未来のことに対して心を悩ますのも心が未来に行っており、今を前向きに生きていないことになります。「今を前向きに生きよ」というのは、「この瞬間に心をおいて生活せよ」ということであります。仏典の中でも、【過ぎた日を追わず、まだ来ぬ先はあこがれず、取り越し苦労をせず、今を大切に踏みしめて行けば、身も心も健やかになる。今日なすべき事を、明日に延ばさず、確実にこなして行くことが、良き一日を生きる道である。】とっております。更に、二宮尊徳の和歌に、<この秋は、雨か嵐か知らねども、今日の務めに田草とるなり>というのがあります。まだ来ていない秋の天候を心配するより、今日なすべきこと、今なすべきことに全力を尽くしていくことこそ、今日の務めなのであります。人生は、その瞬間の「今の心」によって総てが決定づけられて行きます。「今の心」の状態が悪く、不安定であれば、次に来る「今」は、おぼつかないものになります。哲学者ゲーテは、「たったの一瞬が人間の一生を決定する。」と言っています。新聞・テレビがほとんど毎日のように取り上げている忌まわしい事件も、全て「今の心」の不安定な状態が、しからしめるものであります。その一瞬が、自分や周囲の者を苦しませ、心を乱すのであ

ります。禅の修行で一番大事なことは、「正念の相続」ということでございます。誠に、「言うこと易く、行うこと難し」であります。一歩でも二歩でもこれに近づきたいものでございます。だから、わが門でも『三省願文』において【正念の工夫断絶するなからんことを願う】を第一に掲げているのであります。「朝から晩まで、四六時中、寝ても覚めても正念に住する」ことを目標に、先ずは一日一いっちゅうこう 炷香の数息観三昧を深めて行く精進を継続しなければなりません。一日一炷香での三昧が日進月歩で深まって行けば、ませんあん 磨ご 鞞せき 庵あん 白田はくでん 劫石くわつせき 老師の仰る「一日が一炷香」がその先に見えて来るといふものであります。すなわち一炷香の坐禅で身に付けた三昧力でもって、日常の社会人としての様々な活動が自然と「一行三昧」になってくるのであります。この連続が「正念の不断相続」といふものであります。

人生において、一番大事なことは、即今只今の心の置き所であり、「即今只今を大切に、油断のないように生きる」といふ事でございます。鈴木正三和尚は、「心をはっしと守って、悔いのないように『今の心』を充実する、それしかない。」と心学を学んでいる者に教えているのであります。今日の提唱は、これで終わります。

(平成20年4月19日、豊橋市金西寺における修禅会の提唱より)

著者プロフィール

しゆんたん
丸川 春潭 / 本号5頁参照。



のぶとき
延 時真覚 (本名 / 道春)

昭和16年、鹿児島県生まれ。昭和40年、熊本大学理学部卒業。平成14年、ウエルファイド(株)退社。剣道教士七段。昭和52年、人間禅松崎廓山老師に入門。現在、人間禅師家。庵号 / 芳雲庵。